

中国近世小説への招待

才子と佳人と豪傑と

艶物・怪異・英雄譚を
読み解く

への招待

Ōki Yasushi

大木康





NHK
ライブラリー

134

中国近世小説への招待

才子と佳人と豪傑と

2001(平成13)年3月15日 第1刷発行

著者——大木 康

©2001 Yasushi Oki

発行者——安藤龍男

発行所——日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 03(3780)3301[編集] 03(3780)3339[販売]

<http://www.nhk-book.co.jp>

振替 00110-1-49701

印刷——三秀舎／近代美術

製本——芙蓉紙工

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

㊤く日本複写権センター委託出版物

本書の無断複写(コピー)は、

著作権法で認められた場合を除き、

著作権侵害となります。

Printed in Japan

ISBN4-14-084134-6 C1398

中国近世小説への招待

才子と佳人と豪傑と

大木 康

装订：菊地信義

はじめに

中国文学といえ、その代表選手は韻文、古典詩であるかもしれませんが。たしかに詩は伝統的に中国の文学の中心にあり、歴代の詩人たちによっておびただしい数にのぼる作品が作られ続けてきました。今日の日本でも、中国の詩については、多くの書物が著され、テレビ・ラジオなどでもしばしば取り上げられています。

しかしながら、三千年の長い歴史を持つ中国文学の世界は、決して詩だけに終わるものではありません。一口に韻文といっても、その中には詩ばかりでなく、かつての歌謡曲である詞や、歌劇の脚本である曲などもありますし、散文の世界がまた、正統的な文言散文から通俗的な小説に至るまで、さまざまなジャンルの作品を含んでいます。中国文学はきわめて広い間口と深い奥行きを持っているのです。

そうした中で、詩を一方のチャンピオンとすれば、もう一方のチャンピオンであるのが、明清の時代に盛んに書かれるようになった近世白話小説の作品群であることはまちがいません。『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』『紅樓夢』、最近では『封神演義』などの作品名、あるいは劉備、関羽、張飛、曹操（『三国志演義』）、武松、魯智深（『水滸

伝』、三蔵法師、孫悟空、猪八戒（『西遊記』）といった登場人物についてなら、子供向け、大人向けなどさまざまな書物やテレビドラマ、あるいは漫画やテレビゲームを通して、すでにおなじみかもしれません。日本でもよく知られているこれらの作品が、中国近世白話小説の仲間なのです。

一般に宋、元、明、清の時代を中国の「近世」と呼んでおりますが、白話小説のジャンルは、宋、元から明の前期中期の長い助走期間を経て、十六、七世紀、明代の末期に完成し、以後清の時代を通じて膨大な数にのぼる作品が生み出され、中国ばかりでなく、広く東アジア各国の人々に読まれ愛好されてまいりました。その物語の内容も、『三国志演義』などの歴史物、『西遊記』などの幻想神怪物、『水滸伝』や『金瓶梅』などの人情世話物、といったぐあいに、広範囲にわたっています。近世白話小説は、中国文学の中で、たしかに古典詩と対抗するに足る一つの世界を形作っているのです。

そしてさらに興味深いのは、詩と白話小説（通俗小説）が、韻文と散文といった形式面の相違ばかりではなく、詩が雅なるものとして尊ばれたのに対し、白話小説が俗なるものとしておとしめられてきたという、そのかつての文学上の位置づけの違いなど、両者が多くの点において、きわめて対照的な性格を持っていることです。ともに中国の古典文学作品として根本のところでは一つにつながっているにせよ、詩と白話小説は、広大な中国文

学世界の北極と南極に比することができません。この両極を押さえることが、中国文学の全体像を把握する上で、必要不可欠であることはいうまでもありません。

本書の目指すところは、中国近世小説の中からいくつかの作品を選んで解説し、翻訳を通して実際にその一部を読んでみることによって、作品の魅力を提示してみたいということ。そしてさらに、白話小説のたどって来た歴史とその背景について、ごく大雑把にでも見通しをつけること。この二点にあります。

『三国志演義』や『水滸伝』などの代表的な作品は当然取り上げますが、ここではそのほかに、まだ一般にはそれほど知られていないマイナーな作品にも目配りをしてみたいと思います。それらの作品にも著名な作品とはちがった面白さが発見できると思うからです。中国の白話小説は、概して作品の長さが長いことが、一つの特徴といえます。そうした長編大作については、例えば『三国志演義』にしても、『水滸伝』にしても、『西遊記』にしても、『三言二拍』にしても、『紅樓夢』にしても、どれか一つだけを取っても、ゆうに一冊の書物になるほどの世界を持っていますし、実際そうした書物が著されています。この小著が、広大かつ深奥な中国近世小説の世界の、ほんの一部分を紹介しているに過ぎないことは、まずはじめにお断りしておかなければなりません。

この小著を手がかりにして、実際の作品をできれば原文で、あるいは翻訳でお読みいた

だければと思います。日本という国は、中国小説のかなり多くの作品が翻訳で読める条件の整った、世界でも数少ない国です。末尾に翻訳と参考文献のリストを掲げ、ここに取り上げた作品についての、いま一歩進んだ読書のためのガイドを示しておきました。

なお、本書には図版として、小説作品のテキストに付されたさし絵を多く載せることができました。これらのさし絵は、小説の理解を助ける意味ばかりでなく、木版画の芸術品としても水準の高いものが多く含まれております。この版画の鑑賞も合わせてお楽しみいただければと思います。

本書が、中国近世小説への、そして中国文学への道案内の一つの役割を果たすことができるならば、これにまさる幸せはありません。

目次

はじめに

3

第一章 白話小説は講談から

11

- 1 白話小説とその前史 12
- 2 中国の講談と白話小説 25

第二章 色とりどりの三国物語——『三国志演義』

33

- 1 諸葛孔明の策略 34
- 2 『三国志演義』の成り立ち 40
- 3 もう一つの『三国志演義』 48

第三章 歴史のなかの英雄たち——『隋唐演義』『楊家将演義』『説岳全伝』

55

- 1 唐土朝創業の物語——『隋唐演義』 56
- 2 忠義の一族の物語——『楊家将演義』 63
- 3 宋代愛国英雄岳飛の物語——『説岳全伝』 70

第四章 それぞれの因縁——『西遊記』

79

1 孫悟空の生い立ち 80

2 太宗皇帝と三蔵法師 88

3 人気者猪八戒 95

第五章 魔法の武器——『封神演義』『平妖伝』

105

1 神々の壮大な戦い——『封神演義』 106

2 妖術使いたちの反乱——『平妖伝』 114

第六章 不義の財宝を奪え——『水滸伝』

123

1 智取生辰綱 124

2 黒旋風李逵 131

3 浪子燕青 141

第七章 李瓶児という女——『金瓶梅』

151

1 西門慶と潘金蓮 152

2 李瓶児と潘金蓮 161

3 白話小説の二つのパターン 169

第八章 浮世の万華鏡——「三言一拍」

177

1 物語の宝石箱 178

2 不倫と教訓と 184

3 編者馮夢龍 192

第九章 幽霊と落第生——『聊齋志異』『儒林外史』

201

1 鬼狐の世界 203

2 落第生の悲哀 208

3 科挙をめぐる悲喜劇 216

第十章 落花の詩——『紅樓夢』

225

1 男は泥、少女は水 226

2 ゆく春の思い 231

3 続作のはなし 236

結び——近世白話小説のその後

242

参考文献

247

【第二章】

白話小説
は講談から



1 白話小説とその前史

白話・小説

本書でいう「中国近世小説」とは、中国の明代の末にあたる十六世紀ごろから、清代にかけて数多くの作品が書かれ、多くの読者を持ったいわゆる「白話小説」はくわしやうせつを主として指しています。具体的にいえば、『三国志演義』『水滸伝』をはじめとして、『三言二拍』『紅樓夢』などの作品群です。

白話小説とは「白話」はくわで書かれた「小説」ということです。まずはこの「白話」、そして「小説」について考えてみたいと思います。

白話小説も文学作品である以上、それは言語——中国語によって書き記されています。日本語に書き言葉と話し言葉があるのと同じように、中国語にも書き言葉と話し言葉があります。書き言葉を「文言」ぶんげん、話し言葉を「白話」といいます。「白話」には、実際に口頭で話されている言葉を指している場合もありますが、話し言葉を文字に記録したもの、つまり日本でいう言文一致体を指す場合もあります。「白話小説」とはつまり、話し言葉で記述された小説のことなのです（「小説」には「文言」で記述された「文言小説」もあり

ます。本書の中では、『聊齋志異』^{りようさいし}が文言小説の仲間に属します。

ただし、話し言葉といつても、広い中国のこと、そこにはおびただしい種類の方言が存在します。例えば蘇州や上海など長江下流に分布するいわゆる呉語^{ごご}と南の広東地方の粵語^{えつご}で会話をしようとしてもまったく通じないわけです。となると、蘇州の人が、あるいは広東の人が、本当に自分の話し言葉を文字に書き記したとしたら、それはその一地方の人にしかわからないことになってしまいます。これでは困ります。

実際には、日本語に標準語があり、今日の中国語に普通話^{プートンホワ}という共通語があるのと同じように、かつての中国にも一種共通の話し言葉がありました。それは「官話^{かんわ}」と呼ばれる言葉です。「官話」は北方の方言を基礎にした言葉ですが、これが官話と呼ばれるのは、全国各地の出身者が一堂に会して話さなければならぬ都の官僚の世界において、また出身地とは異なった地方へも赴任してゆかなければならなかった官僚たちの間での共通語としての性格を持った言葉だったからです。この官話を文字に表記したのが、白話小説の「白話」なのです。これは一種の共通語ですから、どこの地方の人が読んでもわかるわけです。

今日の中国でいう中国語——普通話は北京の方言を基礎に定められた言葉ですが、この現在の中国語とかつての官話はともに北方の話し言葉を基礎にしており、類縁関係がある

言葉です。したがって、現代中国語の勉強が、白話小説を原文で読むための最高の武器になるわけです。

日本人は、伝統的に中国の文章を訓読法によって読んでまいりましたが、訓読法が有効な力を發揮するのは、古典的な文言の文章に関してであって、口語語彙の多い白話の文章にはあまり適さないのです。その意味でも、白話小説を読むためには、どうしても中国語の勉強が必要になるわけです。

一例として、清代に曹雪芹そうせつきんによって書かれた『紅樓夢』の一節を見てみましょう。第二十三回。主人公の賈宝玉かはうぎよくは父の賈政かせいに呼び出され、はじめに科挙かきよの勉強をせず、艶っぽい詩ばかり読んでいるといって油をしばらくられます（本書第十章参照）。その後、宝玉が自分の部屋に戻ってきた場面。

剛至穿堂門前、只見襲人倚門立在那裏。一見宝玉平安回来、堆下笑来問道、「叫你作甚麼？」宝玉告訴他、「沒有甚麼、不過怕我進園去淘氣、吩咐吩咐。」

穿堂せんどう（奥へ通り抜ける通路にもなっている部屋）の入口まで来たところで、見れば襲人しゅうじんが扉によりかかって立っておりまして。襲人は宝玉が無事に戻ってきたのを見るや、笑

みをうかべてたずねます。「あなたをお呼びになってどうなさいました？」

宝玉がいいいます。「なんでもない。僕が大観園に行つていたずらをするといけないと思つて、注意されたただけだよ。」

襲人は宝玉付きの侍女です。実は宝玉が彼女につけたその襲人という名前が、艶詩の句から取られているといつて、父親にとがめられてきたばかりです。心配している襲人をかばう宝玉のやさしさがあらわれている場面といえるでしょう。ここで「剛」「只見」「立在那裏」「平安回来」「堆下笑来」「問道」「叫你作甚麼」「告訴他」「沒有甚麼」「怕我進園去」「淘氣」「吩咐吩咐」などは、いずれも口語の語彙、言い回しなのです。これらの語句は、みな現代中国語の辞書の中で拾うことができます。『紅樓夢』の文章が現代中国語の知識によつて読める、というよりむしろ、現代中国語の知識がなければ読めないことがおわかりいただけるかと思ひます。

さて、白話小説の白話とは、官話を文字に書き記したものの、といひましたが、それがあくまで話し言葉であつた以上、どうしても書き言葉の文言より低く見られるものであります。

かつての中国では階級の区別が厳然と存在しており、基本的には経書と詩文についての